

## 慢性腎不全患者の内シャントの存在が患者に及ぼす影響

東病棟9階 ○紺清寛子 土本千春 倉田真琴 大西晶子  
長田朋子 西尾清子 福岡明美

key word：慢性腎不全 内シャント 心理

### はじめに

慢性腎不全患者は、残腎機能の程度により、血液透析療法のために上肢に内シャントを作成する。

当病棟では、近年透析導入の原因疾患の第一位である糖尿病性腎症に加え、近年減りつつあるIgA腎症やのう胞腎、しいては遺伝子疾患による透析導入を余儀なくされる患者もいる。そのなかで、「こんなになるんか…」など、内シャントに対してマイナスイメージを受けたような発言が聞かれた。この発言は、内シャントという血流の変更によっておこった血管の怒張、蛇行、加えて透析時の穿刺によって起こる傷などの外観変化に向けた発言であった。

慢性腎不全患者にとって、内シャントの作成や成長が生命維持のために必要不可欠である反面、患者の精神面や日常生活に何か影響を及ぼしている可能性があると考えられた。しかし、先行研究において内シャントそのものが患者に及ぼす影響についてはほとんど報告がない。そこで、実際に内シャントに対して患者がどのような思いを持ち、それがどのような影響を及ぼしているのかを知ることで、内シャントをもち血液透析をしている慢性腎不全患者の看護に生かしたいと考える。

### I. 目的

内シャントが患者に及ぼす影響を知ること、内シャントをもち血液透析をしている慢性腎不全患者の患者理解に役立てる。

### II. 研究方法

1. 参加者 慢性腎不全で内シャントを持っており、本研究に同意の得られた成人患者8名
2. 期間 平成17年7月～9月
3. 方法 研究者1～2名が個別に半構成的面接を行い、面接内容を逐語録に起こした。質的研究のアプローチの手順に沿って分析を行った。逐語録を何度も読み返し、同じ意味付けと思われる文脈をカテゴリー化した。さらに、カテ

グリー間の関連性について検討した。

4. 倫理的配慮 研究の目的・内容・方法を説明し、得られたデータは研究以外の目的には使用しないこと、プライバシーを守ること、個人が特定されないこと、同意しなくても診療や看護に不利益がないことを説明し、同意書へのサインをもって同意を得た。同意書は専用ボックスにて回収した。

### III. 結果

#### 1. 参加者の概要

年齢は30～75歳、性別は男性2名、女性6名であった。透析回数は週2回(5hr)が3名、週3回(4hr)が5名、シャント歴は5ヶ月～23年、シャント閉塞経験は、なし3名、あり5名であった。

#### 2. 各カテゴリーの説明

分析の結果、16カテゴリーに分類できた。カテゴリーとその説明、サブカテゴリーを実例と共に表1に示す。

#### 3. 各カテゴリーの関連性

各カテゴリーより、シャントを持ち透析を行っている患者の心の動きが表せた(図1)。

透析をしながら生きていく患者の心は《普通に生活できることの喜び》《透析による重み》という2つのカテゴリーが同時に存在し、それらの占める割合は変化する。そして、これは以下のカテゴリーにより影響を受ける。《シャントへの希望や期待》は《普通に生活できることの喜び》側へ、《嫌な気持ち》《他人の目が気になる》《きずもの感》《音や異物感》《閉塞の危険性・不安》《シャントによる不便や制限》は《透析による重み》側に加重し、これらは流動的で重さが変化するものである。また、《生きていくために必要》《シャントを守るための行動》《医療者による安心感》はどちらにも影響する。各カテゴリーはその時の環境や身体状況などによって様々に重さを変える。

また、シャントを作成するまでの《透析確定のショック》《透析までの葛藤》《わからなかった自分の変化》《透析への覚悟》という過去の出来事も患者の心に影響を与える。《透析確定のショック》《透析までの葛藤》《わからなかった自分の変化》は《透析による重み》側へ《透析へ

の覚悟》は《普通に生活できることの喜び》側へ加重をかけている。そのため、透析患者はシャント作成の時点で《透析による重み》側に傾いている。

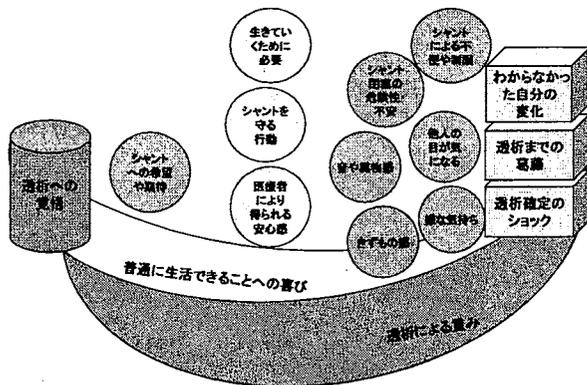


図1 シャントを持ち透析を行っている患者の心の動き

#### IV. 考察

##### 1. シャントの存在によりもたらされ、持続する思い

シャントができることで患者は《音や異物感》という自分のものではない感情がもたらされ、シャントの外観変化によって《嫌な気持ち》や《他人の目が気になる》ようになる。なかにはシャントの作成により《きずもの感》を持ち、自分の価値観を低下させてしまう患者もいた。透析により安定した生活をしている人でも、時間を経てもなおマイナスイメージの категорияが語られ、心の根底にあり続けるさまが伺えた。そして、患者はシャントの作成によってもたらされたこれらの感情を《生きていくために必要》と意味付けをすることでバランスをとっていると考えられる。これらのことから、シャントの存在がもたらすものは、外観変化のみならず、自己の価値観にまでも影響するものであった。医療者は、揺れ動きながらもなくなりほしくないその思いを、重要視した関わり方をしていく必要があると考える。

シャント作成時に行われる医療者の指導により《シャントを守る行動》はすべての患者がとっており、さらに患者自身の経験から身につけた自分なりの《シャントを守る行動》が語られた。これは、シャントの状態が良くても、維持改善を望む《シャントへの希望や期待》や《閉塞の危険性・不安》《シャントによる不便や制限》を反映している行動であると考えられる。

透析歴が長くなってくると、シャントは血流

の強さや穿刺傷のため「ぼこぼこ」に外観を変える。透析が安全に行われるためには、医療者や患者にとって目立つしっかりしたシャントは良いものと考えられている。しかし、今回語られたことから考えると、シャント作成時のシャント管理方法の指導とその後のトラブル予防の看護だけではなく、医療者はシャントの存在によりもたらされる外観変化や持続する思いに注意を向け、シャント作成後も継続したシャントケアを行う必要があると考える。

##### 2. シャント作成（透析決定）がもたらすもの

シャントについての面接であったが、透析をしながら生きていくことについて語るものが多かった。このことは、シャントと透析とは切り離して考えることができないもの、ということをおぼわしていると考えられる。

##### 2-① 透析をしながら生きていくことの不安定さ

参加者は《普通に生活できることの喜び》と《透析による重み》を同時に述べ、人によっては喜びの語りが多く聞かれたり、辛かった時代についての重みの語りのみ聞かれていた。このことから、透析患者は《普通に生活できることの喜び》と《透析による重み》が同時に存在し、これらの割合が変化するという心の状態であると考えられる。さらに、重みが増える各カテゴリーが流動的に働き、容易に心のバランスは崩れやすいと考える。

よって、安定しているように見える患者にも継続して注意を向けていく必要がある。

##### 2-②. 患者にとってシャント作成は透析をしながら生きていくことへの決定的なできごとである

春木<sup>1)</sup>は、透析開始を告知された患者は宣告として受け止める傾向にあり、その時の衝撃は大きいものと述べている。今回も同様に、医師から透析導入を告げられた患者は《透析確定のショック》を受け、《透析までの葛藤》のなかでシャント造設術を受けていた。その状況のなかで、同時に語られた《わからなかった自分の変化》《透析への覚悟》は注目すべきものであると考える。

ある患者は透析導入に際し、「段階をおってやっていたようにみえたけど・・・わからなかったんです」と《わからなかった自分の変化》を語った。わからなかったと語る多くは宣告の衝撃・透析のイメージの悪さ・価値観の一変などの心の衝撃・からだの状態の悪さによって、シャント造設時に見ても説明を聞いても「自分がわからない」状況におかれていたということが

わかった。医療者は体の状況と一緒に心の状況へもしっかり目をむけ、その患者の心の状況を凶る感受性を養う必要があり、待ち・見守り、時期を見極め、また関わるという継続した看護を行う必要がある。

「仕方ないと覚悟した」「いつかはせんなん」という《透析への覚悟》を語る参加者は《普通に生活できることの喜び》を印象的に語った。《透析への覚悟》は透析をしながら生きていくうえでよいほうに大きく影響するものであるということが伺えた。

これらのことより、《透析への覚悟》《わからない自分の変化》のカテゴリーから、病気と向き合うことに関する自分の中のゆとりの程度を伺わせる。「すばらしい先生にめぐりあえたことで透析自体も軽くなった」と《医療者による安心感》を語る患者もおり、病気と向き合う機会をつくる、心も体もゆとりをつくる手助けをするということがシャント作成時（透析確定からシャント造設術施行ひいては透析開始まで）に重要な看護となりうるのではないかと考える。

春木は透析開始前に透析を納得している患者や、医療者・家族との人間関係のよい患者は受容しやすいと述べているようにシャント作成という時期は大変重要な時期であると考えられる。透析をしながら生きていくことを支える看護を充実させるために、シャントがもたらすもの・シャント作成決定がもたらすものを認識し、シャントを作成することが患者にとって、透析への通過点ではなく、透析を決定する象徴的なできごとであるという患者の心を感じながらシャントケアを行うことが大事であると考えられる。

#### IV. 結論

1. シャントの存在によりもたらされ、持続する思いとして、《生きていくために必要》と思いつながらぬ、《嫌な気持ち》《他人の目が気になる》《音や異物感》《きずもの感》という思いがあった。また、《シャントを守るための行動》《シャントへの希望や期待》《閉塞の危険性・不安》《シャントによる不便や制限》という思いがあった。

2. シャント作成（透析）決定がもたらすものとして①透析をしながら生きていくこと不安定さ②患者にとってシャント作成は透析をしながら生きていくことへの決定的なできごとであることがわかった。

#### 引用文献・参考文献

- 1) 春木繁一（松江青葉クリニック）：【プライマリ・ケアのためのうつ、不安障害の診かた】身体疾患に伴ううつ 腎疾患をもつ患者（ことに腎不全患者＝透析患者）の「不安」と「抑うつ」、治療(0022-5207)、87巻3号、Page495-500、2005.03
- 2) 二重作清子：血液透析患者の病気の体験における心理-病気の受容に影響する要因の解明-、福岡大学大学院論集/福岡大学大学院論集刊行委員会「編」、34巻2号、Page1-24、2002
- 3) 稲垣美智子、松井希代子、平松知子、武田仁勇、河村一海、中村直子、永川宅和：糖尿病性腎不全患者における血液透析管理に関する心理的特徴、金沢大学医学部保健学科看護学専攻紀要 Vol.23No.2、Page103-106、1999
- 4) 清水宏子（磐田市立総合病院 6階西病棟）、馬淵弥生、山本篠、河村ゆかり、村松豊子：透析療法選択時における自己決定要因を探る、磐田市立総合病院誌、第5巻第1号、Page71-75、2003
- 5) 原明子（岡山大学医学部歯学部付属病院看護部）、林優子：血液透析患者のストレスと対処、岡山大学医学部保健学科紀要(1345-0948)、15巻1号、Page15-21、2004.12
- 6) シェリフ多田野亮子（佐賀医科大学大学院医学系研究科博士課程）、大田明英（佐賀医科大学医学部看護学科）：血液透析患者の心理的適応（透析受容）に影響を与える要因について、日本看護学会誌、Vol.23No.1、Page1-13、2003
- 7) 出射史子（岡山大学医学部附属病院）、加藤久美子：慢性腎疾患患者の主観的体験世界、岡山大学医学部保健学科紀要、12、Page19-26、2001
- 8) パトリシアベナー、ジュディス ルーベル 難波卓志訳：ベナー/ルーベル現象学人間論と看護、第1版第社、1981
- 9) 二重作清子：患者の病気の体験による看護の検討-長期血液透析患者を通じて-、日本看護協会第29回成人看護学Ⅱ論文集、Page123-125、2000
- 10) 大和田摂子、柏木哲夫：中途障害者における受傷後の適応に影響をおよぼす心理・社会的要因、第3回日本臨床死生学会特集、Page67-73、1998
- 11) 上田敏：障害の受容-その本質と諸段階について、総合リハビリテーション、Page515-521、1980

